

2

006年に2泊3日でソウルを訪れた。キャリア

バックは使わず、手提げカバン2つだったから、考えてみると、毎週、東京―仙台を往復しているときよりも身軽である。目的は、リウム・サムスン美術館と清溪川の開発を見ることがだった。

清溪川は、暗渠の覆いと高架道路を撤去し、川を再生させたプロジェクトである。現大統領の李明博がソウル市長だったときに推進し、2005年にお披露目となった。6キロに及ぶ全行程を歩いたが、いろいろなタイプの橋が架かり、土木デザイナーの博覧会場のようだ。

高架道路を模した外観の清溪川文化館の展示によれば、川沿いに建物が密着し、生活の場があった昔の風景は再現されていない。開発後は自然の川ではなく、ポンプで水をまわしているという。つまり、引きのばされた「池」、あるいは「公園」である。絶対に人が溺れないような浅い川は、新しい「自然」の公

共空間をソウルに与えていた。

04年にオープンしたリウム・サムスン美術館は、マリオ・ボッタ、ジャン・ヌーヴェル、レム・コールハースという、3人の世界的な建築家の競作である。閑静なエリアにたち、ゆつくりと美術を鑑賞することができる。逆円錐と直方体からなるボッタ棟は、テラコッタ・タイルの外壁に覆われており、貴重な古美術を展示する。このテクスチャーは、韓国の巨匠、金壽根の現代建築と通じるところがあり、地元で受け入れられやすいように思う。

一方、現代美術や企画展示を受け入れる、ヌーヴェル棟とコールハース棟は、錆びたステンレスやガラスを多用し、作品と似合う現代的な感覚を表現している。ボッタ棟とは対照的な表情と形態をもつ。ヌーヴェルは自身の設計によるパリのケブランリ美術館に通じる飛び出す展示ボックスを用い、コールハースは黒いヴォリュームが宙に浮かぶ。3人の個性がそれぞれよ

く發揮されている。

アジアの通貨危機による一時中断を乗り越えて実現した、夢のようにせいたくな建築家の組み合わせである。韓国の代表的な企業サムスン社の文化への力の入れようがうかがえるだろう。

残念ながら、東京ではこれほどのスター建築家を集めた美術館はない。ヌーヴェルの手がけたビルは建ったが、美術館の計画は消えた。ボッタのワタリウム美術館はある。コールハースの作品はいまだない。しかし、リウムが本当にすごいのは、一粒で三度おいしい美術館建築であることだ。日本企業も、こうした冒険的なプロジェクトを見ならってほしい。

ソウルに生まれた 新名所

@Seoul



ソウル特別市龍山区にあるリウム・サムスン美術館

写真提供：筆者

をちこち散歩

五十嵐太郎

いがらしたろう
建築史家
東北大学准教授